

## 令和4年度 戦争にまつわる体験談

### 「空襲におびえた昭和20年」

竹田 ムツ子さん (89歳)

毎年8月15日が巡ってくるたびに戦争のことを思い出します。終戦の年の昭和20(1945)年1月ごろからは戦況の悪化が国民学校6年生の私にも感じられました。当時、私は現在の宮崎県日南市に両親、妹の6人で暮らしていました。何かにつけて節約、節約の時代でした。国民学校の卒業記念の写真すらありません。

米軍機による空襲が激しくなったのは5月ごろからで、集団登下校をするようになりました。登校途中に空襲警報が発令され、家へ引き返すことが続きました。6月になると、畑仕事をしていた近所のおばさんが、米軍機の機銃掃射に遭って亡くなったり、田んぼに爆弾が落とされました。夏休み前には学校は休校になりました。そのころは朝から弁当持参で防空壕に入り、夕方、壕から出るという生活でした。

7月になると、夜間も空襲が始まりました。わが家に近い油津港(\*日南市)付近に焼夷弾が落ち、商店街が全焼しました。その火災を私たち一家は防空壕から目撃しました。私は腰が抜けるほど恐ろしい思いをしました。この空襲では近くの山にも、たくさんの不発の焼夷弾が落ちました。山火事にならなかったのが不幸中の幸いでした。

そのうち、いろいろな噂が飛び交いました。近いうちに油津港の沖から艦砲射撃があるということです。両親は、子どものうち3人を伯母の家に疎開させました。伯母宅は私の家から一里(\*4キロ)ほどの山間にありました。毎朝、伯母と一緒に3キロほど先の山の畑へ出かけ、畑仕事を手伝う日々でした。

そして8月15日。夕方、さつまいもの草取りなどの畑仕事から戻ると、誰かが「日本は負けたよ」と言うではありませんか。私は一瞬、真っ青。体の震えが止まりません。「日本が負ければ皆殺しになる」と信じていたからです。夜の8時ごろ、両親が迎えにやってきました。親子6人が久しぶりの再会に泣いて喜びました。一里の夜道を家族そろって、テクテク歩いて家へ戻りました。この日はお盆。わが家の仏壇で仏さまに手を合わせ、「ありがとうございました」と、お礼を言いました。